平成２８年８月２６日

第１回 南相馬市総合教育会議

南　相　馬　市

第１回 南相馬市総合教育会議 会議録

１　開催日　平成２８年　８月２６日（金）

２　場　所　市役所 東庁舎２階　第三会議室

３　会議時間　開会　午後　２時３０分
　　閉会　午後　４時２６分

４　出席者

市　長	桜井　勝延
教育長	阿部　貞康
教育長職務代理者	大石　力彌
委　員	髙野　惠以子
委　員	渡辺　金作
委　員	濱須　弘仲
復興アドバイザー	岸　　博幸

５　欠席者（０名）

６　説明のため出席した者の職氏名

（市長部局）

復興企画部長	長塚　仁一	次長兼企画課長	牛来　学
企画係長	藤原　道夫		

（教育委員会事務局）

教育委員会事務局長	木村　浩之	次長兼教育総務課長	新田　正英
課長補佐兼総務係長	武田　智芳	施設管理係長	志賀　和浩
学校教育課長	志賀　英司	学校教育課参事	松本　浩一
幼児教育課長	新妻　由美子		

７　傍聴者（３名）

８　本日の会議に付した協議事項等

（１）　魅力ある学校づくりについて

（２）　その他

【配布資料】　別添のとおり

資料１　小高区内教育施設の現状について

資料２　魅力ある学校づくりの取り組みについて

午後 2 時 30 分　開会

○企画課長

只今より平成 28 年度第 1 回南相馬市総合教育会議を開催させていただきます。

初めに、市長よりご挨拶をいただきます。

○市長

皆さん、こんにちは。

第 1 回目の南相馬市総合教育会議開催にあたり、ご挨拶申し上げます。今日はお忙しい中、慶応大学大学院教授の岸　博幸先生においでいただきました。岸先生には復興アドバイザーを務めていただいておりまして、昨年二中での講演をしていただきました。その際に、全体に対して岸先生がお話をする一過性のものではなくて、南相馬市の子どもたちに対してしっかりとカバーさせていただきたいというお話もありまして、その方針策定にあたっても教育委員会のみなさまとざっくばらんにお話しをさせていただきたいという中で、子どもたちの、特に解除されたとはいえ小高区での教育についてはまだまだ子どもたちが帰還率がよくないわけでありますので、帰還に向けてもソフト面でもしっかりと教育方針を示すことによって保護者の皆さんに対しても、小高に戻ってまた南相馬市で勉強したいという意欲を持っていただけるようにしていきたいという風に思います。幸い、先日も岸先生に加えて、文科省の事務次官であった土屋定之さんにも復興アドバイザーとして引き受けていただきました。全国の様々な学校、大学知識を文科省が束ねているわけでありますので、南相馬市の教育の在り方というものについては、岸先生含めて多くの有識者から我々がご意見をいただく中でしっかりと方針を定めながら、学校教育及び子どもたちの育成にあたってまいりたいと思っておりますので、委員の皆様に今後ともお力添えをいただきますとともに、今日は委員の皆様には忌憚のないご意見を賜ります様お願いいたします。よろしくお願いいたします。

○企画課長

続きまして、出席者の紹介でございますが、次第の裏面をご覧いただきたいと思います。

それでは、市長にはただいまご挨拶いただきましたので、教育長より順次、自己紹介ということでお願いしたいと思います。

（出席者自己紹介）

○岸復興アドバイザー

今日はお招きいただきありがとうございます。私個人的に震災があってから被災地の復興をできるチャンスがあればどんなものでもさせていただきたいと思っておりまして、その中で南相馬に関しては徐々に関わらせていただいています。教育に関しましては、地域の未来をつくるのは教育であり、復興では教育が一番大事だと個人的に思っています。余計なことを言えば、私の子どもが 6 歳と 3 歳、上の子が来年 4 月から小学校、下の子が幼稚園に入るということになりまして、私は大学院で教えているんですが、自分の子どもをどう教育するかという観点を考えると、今は教育もだいぶ難しくなっていて、逆に言えばそういった環境でしっかりとした教育をするかということが地域の魅力を高める、地域の将来を作るということにもなると思いますの

で、そういう意味では、非常に大きい意味を持つと考えていますので、力になれればと思っております。よろしくお願いいたします。

○企画課長

続きまして協議事項に入るわけですが、南相馬市総合教育会議設置要綱の第 4 条第 1 項の規定によりまして、これより市長が議長となり進行することとなりますのでよろしくお願いします。

それでは市長お願いします。

○市長

それでは暫時の間、進行役を努めさせていただきますのでご協力よろしくお願いします。

お手元の次第に沿って進行させていただきます。

協議事項として（1）魅力ある学校づくりについて、事務局より説明願います。

○教育総務課長

（資料 1、資料 2、資料 3 について説明）

○市長

これについてご意見はございませんか。

小高区の学校再開について非常に重要なことでもありますし、小高区で子どもたちを育てていく意味というのは非常に大きいことだと思いますけども難しい問題でもあって、ご承知のとおり子どもが集まるかどうか正直わからない。でも小高区で子どもを教育していかなければならないという人たちも小高区に子どもたちをどんどん数多くしていってほしいという人たちもいますので、じゃあどういうところから始めようかということで、私も含めて、小学校を芝生化しているところはないので、幼稚園保育園はすべて芝生化してありますけれども、小高区の小学校で初めて人工芝を校庭にはろうじゃないかということで、そういうことも含めてまずは魅力あるといったときにハード的に魅力がないと仕方ないなと、あとは先生、スタッフ含めて内容を充実させていければいいんじゃないかと。教育委員会の皆さんに整備を進めてもらっています。このことも含めて、子どもたちの動向も含めて、みなさんからご意見をいただければと思います。

岸先生、感想としてお願いします。

○岸復興アドバイザー

ざっくばらんに言ってよろしいですね。取り組みについてですが、ハード面に関してその通り必要があると思っていますけれども、この最初のページの方の学校運営ということに関して、これを拝見させていただいて私が思ったことを非常にざっくばらんに言わせていただきます。まず、まじめに考えると当然こういう三つのものになるんだろうなという、こういう感じになるんだろうなと思いますし、方向も実際間違っているとは思っていません。ただ、そこまでの具体的な中身で何をやるんだっていうのが一番大事なんだっていうそういった観点から考えるところが大事なんだなと感じています。それを保護者に伝えることも。そういった意味で個人的に思っている方向として加えたほうがいいと思うのが、二点あります。一つ目は子どもを成長させる

という観点からは、当然最低限の基礎学力を身に着ける、これが必要なんですが、子どもたちに成功体験を味あわせるということが非常に大事なんですね。成功体験で一番わかりやすい例が、夏の甲子園の高校野球で、甲子園に出る過程で高校球児たちは毎日ハードな練習をしているのです。練習をしている成果として勝ち抜いて、甲子園という舞台に出ること、要は一生懸命日々トレーニングをして、その結果として甲子園という大舞台で評価される。これはやはりすごく大きな成功体験で、実は甲子園に出た高校球児は野球以外のことをやらせても比較的成功体験を延長して頑張っていくことが出来るということが有名な話です。こういう成功体験をしっかり味わわせる、味わえるようにしてあげることが非常に大事なことだと思っています。実は自分自身沖縄でそういう活動に関わったことが 10 年くらい前にあります。沖縄県の今はうるま市というところで、市町村合併前に勝連町というところがありまして、沖縄地方の伝統芸能である組踊を現代化した組踊を子どもたちの課外活動でやるようにさせました。沖縄では多少知名度があった演出家に勝連町に来ていただき、勝連町の中学・高校の学校関係なく課外活動という内容で参加できるようにしました。組踊には舞台があって、自分たちで舞台を作るということ、踊りをしっかり演じるということをずっと課外活動として自由参加でやらせました。その課外活動がだんだん評判を呼びまして、一番評判を呼んだのが不登校の子どもが自分の居場所を見つけられたということです。学校で不登校になった子がその課外活動をがんばったということで、評価されました。県知事より頼まれてその活動に関わっていたんですが、その中ですごく感じたことは、現代版組踊を自分たちで作って自分たちで演じてやるということで、成功体験を積んだ子は非常に強くなっていました。中学 1 年生から高校 3 年生まで地元の子どもたちは自由に参加できるのですが、参加する中で舞台をやる子もいれば、音楽をやる子もいる、裏方さんをやる子もいる、みんな自分たちで集まってやるんです。日々学校が終わって、一生懸命舞台を作ってやると、4 つの学校から集まってばらばらにやるので高校生がリーダーシップをとって中学生を引っ張っていく。その結果として、地元の世界遺産の場所で講演をすると、だんだん話題を呼んでお客さんが見に来る。講演を見たお客さんが拍手をする、という成功体験を積んでいるわけです。子どもたちはそういう成功体験をしてすごくしっかりしてくるんです。余計な話をすると、リーダーシップをとっていた高校生に、慶応大学受験を勧めました。AO 入試だったんですが、試験官 3 人に気に入られ、合格が決まりました。そういうのを見ていると、子どもたちがいかに成功体験を味わえるか、それが勉強でもいいですし、クラブ活動でもいいですし、学校のフリータイムの課外活動でもいいですし、そういった成功体験を踏まえると子どもの成長に重要だなと思います。いかにそういったことを小高で味わえるようにするかということが教育の大事なことだと思います。

次に二点目として、観点がまったく違ってきますが、自分自身が教育に関わっていまして、いろんな形で交流があるんですが、そこでつくづく感じるのですが、今、世の中はどんどん変わってきていて、いわゆるグローバル化なんですが、その中のデジタル化（ICT 教育）がどんどん進んでいるんですね。欧米などでは小学校レベルでこういう議論がなされているんですが、今までみたいな記憶が中心の教育ではなくて、早い段階から三つの教育をする必要があるという内容になっていて、まずはどういう力かと言いますと、一つ目はまず自分で問題を設定できる能力。つまり、世の中の変化が激しいので、そもそも何が課題になるかっていうのはなかなかわからない。学校ではどうしても先生が与えてくれた課題を解くというのが中心になってきます。そもそも社会に出た後のことを考えると、自分で問題を設定できなければいけない。例えばクラブ活動をやっていて、野球でチームが強くならない、強くならない原因はなん

なのかということを自分で問題を設定できる能力が大事になってきます。二番目の部分は、その自分で設定した問題についてクリエイティブな問題解決を考えられるかということです。世の中、イノベーションという言葉が使われますが、やはりステレオタイプな答えではなくて、自分なりの考えがちゃんと出せるように、クリエイティブな答えを出せるような力が必要なんだと思います。

三つ目は、このクリエイティブな問題解決を作るためにもコミュニケーションの力を強化しなければならないといわれています。アメリカ、ヨーロッパの先進的な小学校では小学校レベルから、問題設定能力・クリエイティブな問題解決能力・コミュニケーション能力、これを強化しなければいけないという教育が行われるようになってきています。ある意味、世の中の変化が激しいなか、子どもたちが将来ちゃんと生きていけるようにする力という観点ではいわゆる基礎的学力に加えて、これから必要とされる力を強化するというのを加えていくほうがよいのではないかと個人的に思います。一番目と二番目の点を併せて考えると、特にこの「ふるさと教育の充実」に関しては子どもや親から魅力を感じてもらうアプローチがあるのではないか。つまり、日本全国でふるさと教育をやりますが、はっきり言って伝統文化を学びたいという子どもが何人いるかというところが非常に微妙です。もっと子どもたちをまちづくりに巻き込んでしまうアプローチもあるのではないでしょうか。実際東京では、学校ではないが NPO でやっているのですが、今世の中ではデザイン思考というのが問題解決の大胆なアプローチだといわれていて、その思考を使って子どもたちにワークショップをやりまして、自分なりの問題設定をする、それに対して、クリエイティブな問題解決をする、という活動が行われています。実際効果を発揮しているというのがありますので、小高地区が非常に大変な地区ですので、こういう状況であるからこそ、この危機を逆手にとって、これをいい機会ととらえ、子どもたちが地元の問題を自分たちで発見して、それに対する解決策を自分たちで考えるという活動をしていけば、その過程でおのずと地元のいいものを学ぶことになると思います。これからの時代、子どもに必要とされる力を小高ではしっかり強化していくんだという方向を出していくことをアプローチとしていくこともありなのではないでしょうか。逆に新しいアプローチをしないで、今までの教育的に伝統文化はこうだということだけをやっていると、意外と子どもたちはその意味をわかってくれないと思います。世界とか東京の最先端でやっている教育を小高で導入して、小高のまちづくりに子どもたちも関わっているというアプローチもあっていいのではないかと思います。

それから、2「個々の学力向上」については、これが一番先生に負荷がかかる大変な部分ではあるんですが、あえて言わせていただくと、ICT 教育というのはしょせん手段にすぎません。手段を通じてどういう授業を達成するのかというのが非常に大事でありますので、それが基礎学力のアップであるのか、または別の部分であるのかで議論になるかと思いますが、あくまでこれは手段であるので、手段の目的化というのは意外とそれで自己満足してしまうが、例えば ICT 教育を使って場合によっては小高で東京とか一部でやっているような内容も勉強できるようにします　とかいろんなアプローチができると思います。そういった意味で ICT 教育は絶対必要ではあるんですが、それを使って何をするかという部分をしっかり明確にしてあげたほうが親御さんも安心する部分もあるのではないかと思います。以上です。

○市長

なかなかビビッドな意見でした。岸先生からいただいた意見について、自分なりの意見を出していただけないでしょうか。目的は小高で子どもたちをどういう風に育て

るのかということです。

○大石教育長職務代理

最後の ICT を使った教育について何を目的とするかという部分について、東京の発想は違うなと思ってしまいました。田舎にいれば、読み書きそろばんスタイルにワンランク上がった勉強をして、進路目標はなんなのかそれに向かって少しでも進めるようにがんばれというようなスタイルでこれまでやってきておりますし、これが無難な道なのかという気もしますが、岸先生のお話のように、ホップ・ステップ・ジャンプと踏み出していってその先を見越して進んでいくのがこれからのやり方であり、教育の道なんだという考えでもやっていかなければならないと感じました。先生のお子さんが 6 歳と 3 歳ということですが、普段の生活のなかで ICT のタブレットなどに接する機会はあるものですか。

○岸復興アドバイザー

正直に申し上げますと、今、子どもがスマホとかをどんどん使いますよね。私はそれを禁止しています。スマホやタブレットを使いすぎると、よほどうまい形でやらないと、受け身でなんでも情報を取り入れるだけになってしまう。これが過ぎてしまうと、自分で物を考えるとか行動するとか能動的な判断ができないんです。スマホやタブレットを使いすぎると、それがしっかりとした教材でそれだけを使うだけならいいですが、ネットなどが自由にできると、受け身になってしまうのが多いです。なので、私の子どもに関してはかなり厳しく利用を制限しています。ゲームも同じです。

○市長

小高区でもどういうことが魅力ある教育なのかということで、しっかりとみなさんに議論していただきたい。

○大石教育長職務代理

やはり、保護者からすると基礎学力、学力テストでいい点数を取ってほしいというところにまずは目がいってしまう。

○岸復興アドバイザー

いかに保護者の要望を満たしながら、実際に子どもたちに将来必要な力を身に着けさせるかという両方を追求するのは大変ですね。ただ、親の気持ちに立って考えるとやはり学力をしっかりさせたいのは当然です。塾に行かせることも大切だが、それを補完的な勉強もさせて、保護者を安心させて、同時に子どもたちにも将来間違いなく必要になるような、自分で問題を作れる力・問題解決を考える力、小高地区だからこそ、この地区の問題をどう解決するかという部分を考えさせる実践例を作るというのも一つの方法だと思います。小高地区だからできるアプローチはあるはずです。

○渡辺委員

私が考えてきた学校づくりというものと岸先生がお話しされたことは、意外な答えが先生から返ってきたなと思いました。スマホとかタブレットとか、それを使用すれば（使い方によっては）受け身になるので、自分のお子さんにもなるべく使わせていないという方向でいるというお話を聞いて驚いているところです。私も学校で指導していたころは、都会の子どもに遅れをとるなという思いが強くて、東京にいる子ども

が優秀に見えていました。岸先生がお話しされたように、成功の体験を味わわせるという、小高ならではの南相馬市ならではの成功感を持ってできるんだという気持ちを植えつけられるようにしていきたいと思います。南相馬市の子どもたちに成功体験を味わってもらいたいです。

○岸復興アドバイザー
　なにか新しいことを始めることもできますし、地域の課題問題に取り組むことも成功体験を積めるようにするということが大事だと思います。私自身、いろんな地区を見てきて、昔と違って地方の若い人は、全員が全員都会に出たいという感じではないことです。

○教育長
　小高にも、震災前の小高中学校は吹奏楽が全国大会の常連だったり、女子バレー部が何度も全国大会に出場していたこともあり、子どもたちも指導者も一生懸命で、地域もそれを理解して、という地域でした。ただ、今はもう崩壊してしまっているので、それも含めながら、今から何が必要なのか、子どもたちは何が必要なのかを、これまでは学校再開のために保護者へ聞いていましたが、直接子どもたちへ聞いていなかったなと。これからは、子どもたちへも何がやりたいのか、何が得意なのかなど一人一人に聞きながら進めていかなければならないなという思いがあります。

○岸復興アドバイザー
　保護者が言うことを最大限尊重しつつも、子どもたちが何を体験していきたいのかが大切です。

○教育長
　多方面から支援していただいて、その中で NPO を立ち上げたりしている方々もいますので、その方たちにも子どもたちの課外活動に協力してもらえるような体制も必要なのかと思います。
　英語教育も多少強化できれば。

○岸復興アドバイザー
　英語を本当に強化しようということであれば、週１回、２回の授業では足りないので、毎日でも英語にふれられるようにすることが必要です。それを実現しようとすることはかなり大変ですが、ICT を活用した遠隔授業等でも対応できます。

○教育長
　小高では英語を日常的に使えるような環境にしてほしいというような要望もありました。

○岸復興アドバイザー
　英語はある程度の量を毎日使わないとうまくなりません。

○復興企画部長
　委員の先生方からご意見をいただきたいと思います。

○高野委員

震災から5年以上小高を離れてしまっていたので、小高の歴史とか伝統を守っていくというのも大切なんですが、それを一番に打ち出してしまって、それが本当に魅力になるのかと思いました。自分の子どもたちも（地元）鹿島の伝統芸能についてあまり喜んでやらないので。私自身は神奈川県出身で、結婚してこちらへ来ました。野馬追とか本当に素晴らしいと思い、子どもたちにもやってほしいのですが、なかなかやってもらえないんです。なので、もちろん伝統を残すことは大切なんですが、先生がおっしゃったとおり、それは残しつつも新しいまちづくりを考えていく方が、たぶん若い保護者さんや子どもたちには魅力になるのではないかなと思います。

○濱須委員

私は今年4月に教育委員になったばかりで、これまであまり教育関係のことを考えたことがなかったんですけれども、今日、岸先生の成功体験のお話を聞いて感銘を受けておりました。今回、小高区の学校再開の問題ということで、先ほど事務局から現状報告があって、全校生徒が92人とかの規模で当たり前のことが当たり前にやっていくことができるのかどうか、少人数であればそれにあったことができるとありますが、岸先生からお話のあった成功体験、例えば野球をやりたい、吹奏楽をやりたい、などあった際にチーム編成できるのか、一定程度制限されてる中で、いろいろな仕組みを作っていかないと一口に魅力のある学校と言っても難しいので、これをどう変えていくかだと思います。小高区に限ったことではなくて、少子化とかの問題もあり、南相馬市全体の学校の規模であったり、統合の問題であったり、実際問題話していかないと。一定程度の人数がいないと、勉強だけではなく、いろんな体験、経験ができないですし、切磋琢磨してというのもできないですし、我々が今こうして何とかしようと話してもどうしていくか、土台が入り口としてきちんととらえていかないと、理想は高く言ったとしても難しい部分もかなりあるのかなと思います。解決方法が何かということは現実的に思い当たらないんですが。

○岸復興アドバイザー

ここに限定した話でなく、かなり地方に行けば行くほど人口減少で統廃合はどんどん進むけれども、せいぜい小学校も中学校も1クラス2クラスしかなく、こういうところは制約がすごく多いのは事実です。だからこそ、近隣の学校と連携しながら、母集団としての活動を増やしていくということをやらないといけないと思います。小高に関しては、中学校でないとできないことに関しては、他の地区の中学校と連携するということも考えることも必要ですし、場合によっては小高の教育らしさを出すという観点からは、この人数だとそんなに多くないですから、小学校、中学校をうまくつなげてしまって小学校・中学校全体でいろいろやれるようにすることもいいと個人的には思います。

だんだん一貫校というのが増えてまして、小中とか中高とか。そういう意味で、数の少なさをそういう観点から考えながらやっていくという。地域の特色という観点からはありなのかなと思っています。

○復興企画部長

私の子どもは、福島市の私立の中高一貫校に通わせています。公立とは違ったいろいろな勉強のサービスが受けられるんですが、都会では中高一貫校がだいぶ増えてきて成功しているということをよく聞きます。それについてはいかがですか。

○岸復興アドバイザー
品川の中高一貫校の評価が高くなっているというのは聞いておりますので、ある程度のところはいっているのかと思います。それがどの面なのか、学力、勉強面だけになっている可能性があります。私は個人的に勉強も大事だけれどもそれ以外のものも大事だと思っていますので、そういった部分で中高一貫校ができればいいと思います。一貫校で勉強だけ前倒しにして受験だけでいいというケースもあるかと思いますので、果たしてそれが子どもたちの将来にいいのかどうかというと若干疑問に思います。

○復興企画部長
先生のお話を聞かせていただきましたが、基礎学力が基本だと、これは当然の話ですね。それから、成功体験をしっかり積むということ、そして現代社会は複雑、多岐にわたっていますので、問題を発見して、それをクリエイティブに解決する能力が大事だということと、当然のこととしてコミュニケーション力は基本だというお話でした。まさにこれは人間力全体のお話だなという感じがいたしました。

○岸復興アドバイザー
それを子どものころから強化しなければという世界の流れになっていますので、実際に必要なことだと思います。そこをどううまく教育の中に取り込んでいくか、学校では基礎学力をしっかりやってもらって、課外活動でそれ以外のものを補完するという全体の設計を考えて、それを親御さんに納得してもらう、ということが一番大事だと思います。
日本は変わってきました。昔みたいに、いい大学を出て、いい会社に入ることが一番いいということがなくなってきました。今後は自分で自分の能力を必要に応じて高めるということが大事なはずです。今まで日本で重視されてきたテストでいい点がとれればいい、入試で通るようにするということだけではまったく意味がないと個人的に思います。

○教育委員会事務局長
先生や委員の皆様からのご意見をいただいて、すぐにやれることをどうやって作っていって、保護者にわかりやすく見せていくことが非常に重要だと思っています。保護者にどう伝えていくか。実は今すごく悩んでいることがあって、保護者の方から、学習塾機能を学校でも持たせてほしいという要望をいただいていて、本末転倒になってしまうのかなと。そもそも学校教育っていうものがあって、いろんな教科をカリキュラムに沿ってやっていくんですね。例えば都会の部分で言えば、学習塾は学校があって、学校が終わった時間で、親御さんがセレクションしてやる。南相馬市は各区においてもすべてが満たされているものではなくて、不足している機能があるわけです。そうすると仙台とか東京とかいろんな都市部においてそういうサービスを経験したご父兄のかたが不満を感じちゃうわけですね。そして、特に小高区では、学習塾をやってくださいと言っても生徒数がこのくらいの人数では学習塾を自分たちで運営となると、ボランティアとかでないとできないだろうなと。商業ベースに乗っていかないですね。だとすればいっそのこと行政が作ってしまうかと考えていた。岸先生のご意見を伺いたい。

○岸復興アドバイザー
やはりきちんと学ぶための教育指導要領があるので、それをやるということ。親御さんもそれに満足しないといけないなと。満足しない部分を学校の課外活動でどう補足す

るか。やりようがあります。例えば、タブレット端末を用いてテレビの中継を使うのも手段の一つです。
　要は学校を補完する形をしっかり作って、そういう塾に通わせたいという人に最低限のことをやってあげるということが復興のためには必要なことなんだと思います。

○大石教育長職務代理
　このあたりの地域で大学に入るということを考えると、よほどしっかり勉強をしないと大学に入るのは難しいですよね。これからは少子化が進むので、大学に入れるところが出てくるとおっしゃる方も中にはいるかと思いますが、そこそこの大学に入るにはまず普通科の高校に行って勉強しなければいけない。普通科の高校でしかも進学者が多く集まる高校に入れるためには、小学校・中学校でそれなりの学力がないと、入ってからお荷物になって…という状況が考えられるんですね。実際、今現在は、この地区の高校は全部定員割れという形で希望さえすれば入れる。そんな状態にある今の子どもたちなり保護者なりに、なんとかして動機づけをうまくやって、高校に入るだけでなく、そのあとのことを考えられるだけの力をつけてやるのには、塾や予備校という部分が保護者としてある意味焦るのではないかと考えています。学校では、勉強だけを本気になって教えてくれという保護者もいると思います。そしてできれば医学部の学校に入れるような、そういう地元出身の医師や地元出身の教員をここで育ててやらないと、そのあと地元が続かないんじゃないかなと、そういう気持ちはあるんじゃないかと思います。都会だと自然と子供たち同士普段の生活の中で意識的に揉まれてるのが出てくるかと思うんですが、ここはのんびりしているのが現実ですから、先生がやれと言ってもあまり実感として感じないで、友達と楽しく過ごすのがいいというのが多くなりがちなんです。この部分にねじを巻くというか、こういうのはどうだという岸先生のアイディアの手がかりがあればお願いします。成功体験をできるだけ積ませてやりたいと思いますが、物理的に無理な部分もありますので。（たとえば野球部で甲子園に出場するとか）

○岸復興アドバイザー
　成功体験は野球などに限ったことではなくて、地域の課題解決をするということも十分成功体験になります。場合によっては、アルバイトでも十分成功体験になりえます。ただ、親御さんの気持ちを考えると当然学力の強化がなされるのが最低限の上で、子どもたちがいろんな成功体験ができるようにするのが重要ですし、小高地区でしかできないような成功体験も十分あるはずなんです。つまり地域の問題ですね。そういった動機づけをいろいろ作ってあげることが大事なんだと思います。個人的には、学校づくりの取り組みについて、具体的にどうかという方策を並べる前に、そもそもこの地域の方針について、子どもを将来どういう人間になってほしいのかという目標の姿を明確にしてあげたほうが、親御さんにもわかってもらえるのかなと思います。
　個人的には、定員割れというニーズの大学もありますが、AO 入試でどんどん入れるような子どもたちを作っていくことが大事なんだと思います。そういう方を追求したほうが実は変に偏差値を意識するよりいい成果が出る可能性があると思います。

○復興企画部長
　偏差値優先よりも AO 入試で将来突破できるような子どもを作る方法の方がいいのではないかとのことですね。

○大石教育長職務代理
　この歳になると十分にわかってくるようになるんですね。ずっとその時期を遡って、その子どもたちを持っている保護者の部分に立つと、あの学校の偏差値は高いとか、そっちの気持ちのほうが多いよね。
　今の小高の保護者の立場にたてれば、こんなに人数の少ない学校においても学習をきちっとやれるのだろうかと。そのあと高校に行ってそのあとどうなるんだろうとそのあたりの不安をなんとかして解消したいなと思います。

○岸復興アドバイザー
　学習塾とかと提携して、課外活動の部分を小高でもちゃんとしっかり受けられるようにすることは重要ですね。
　いろんな親御さんがいると思うので、ある程度にしてあげればいいと思います。学校教育をしっかりしたうえで、学力をより高めたいという方には、タブレットを使うとかそれなりの熟度を高めてできればいいと思います。子どもたちの社会性を強くしたいという人がいれば問題解決に向けていろいろやるという手もありますし。そういう意味で学校の中だけでなく、課外活動の部分も組み立ててあげるということになりますね。

○大石教育長職務代理
　以前はちょっとした簡易な、公文式のようなものをやって学習する時間を確保していたことがありました。今現在ではそこまで余裕あるところはないみたいなので、そろばん塾なんかも一時は盛大にやっていましたが、最近は生徒が集まらないようで。それを商売にしてやるかという、お客さんがいないから無理ですね。

○市長
　具体的に教育委員会の中で、それを方針としてどのように理論づけていくのかと、具体的に学校教育課・総務課あげて、現実に子どもたちに提供していくのかということだと思います。
　だいたい結論は見えてきたんでしょうか。

○復興企画部長
　成功体験などを積んで、子どもたちの人間力を高めることができるようなそういったことが大事じゃないかということです。それのきっかけになるような問題は、小高はたくさんある、と。そしてその成功体験を作りあげるのは、別に勉強や野球だけじゃなくていろんなアルバイトとかそういった問題、自分が成長していくうえで関わってくる問題がたくさんあるので、そういったものをきっかけにして、成長につなげていってはどうかというお話がございました。

○渡辺委員
　岸先生のような方が足を運んでいただいて、いろいろとお話をさせていただければ、子どもたちも直にお話をいただければ変わりますし、保護者も同じだと思いますので、ぜひまた今後も各学校まわって、お話を聞かせていただけたら嬉しいです。

○岸復興アドバイザー
　どんどん自分も来たいと思ってます。そして、教育委員の皆さんにもがんばっていただいて、親御さんでも自分でもいいので、望む方向をできるようにしてほしいです。

○濱須委員
　先ほど成功体験についてお伺いしたが、渡辺先生がお話しされたように、多様な意見を聞くために、有名な方に来ていただいて話を聞くっていうことは、自分たちが気が付かなかったことに、地元の人たちが気付けるということです。岸先生の成功体験のお話については保護者に聞かせて、こういう方法で子どもを伸ばす方法がありますよというように発想を変えるという道筋の中でいく機会があれば、保護者の理解も深まったりということもあるでしょうし、前段の中で小高区の再開に向けた懇談会の中で非常に出席率が悪いという現状が数字的に出ていて、教育が大事だとかいう話があっても、こういうところできちんと意見を述べていないということなんです。少なくとも自分の子どもがそこに就学するかどうかという問題に対して、あの数字（懇談会の出席率）だとちょっとどうなんだろうというのがあったりしますね。人を集める工夫も話しながら、懇談の中で意見を引き出すというようなことで、子どもの教育も含めて親の教育も必要なのかなと思います。

○市長
　先日、教育委員会事務局の皆さんと話した際に、どういう学校にするということをまず打ち出してここに来てもらえるかどうかというふうに意志確認しないと、小高区に戻るかどうかという議論だけだったら、自分がいるところと比べてしまうから、そうしたら戻らなくていいよねというようになってしまう。小高の教育の像を示したうえで、こういう取り組みをします、こういう設備にします、それでみなさんいかがでしょうかという問いかけの方がいいと思います。

○濱須委員
　本当はもっと保護者の人に来ていただいて、問題解決をする上では多様な意見を聞かせてもらった方がやりやすいです。小高に戻って、学校に通うかどうかを決めるのは子どもではなく大人ですから、親の考えに子どもは左右されているわけです。ですから、保護者とのコミュニケーションづくりは増えてきているのかなと思います。

○高野委員
　私は保護者の立場で岸先生のお話を聞いていて、反省することが多いですし、共感することもあります。大変勉強になりました。今後の子育てに役立てていきたいと思いました。それから、岸先生のお話にあった成功体験についてですが、ぜひ保護者の方に聞いてほしいお話だと思っています。

○市長
　職員や教育委員会の皆さんが（成功体験について）話すと、保護者の皆さんはどうしても押し付けられているように感じてしまうので、タレント的な要素を持った岸先生には近づきやすいというような、近寄ってみたいというような感覚がたぶんあると思います。

○教育長
　最終的には、小高で学んで、その子どもたちがどういう大人になりたいのか、まずそこを正直なところを聞いてみたいなと思います。保護者もこういう大人になってほしいという思いはあるんでしょうけれども、子どもの思いと大人の思いはズレがあって、そういうためには、こういう学校にしますと示せればしめたもんだなと思います。

○岸復興アドバイザー
　教育という行政の一番大事な部分だと、どうしてもまじめに保守的に考えてしまうところがあると思うんですけれども、小高地区の現実を考えるとそれではなかなか難しいところもあるような気もします。市長がおっしゃったように、どういう教育をするんだという部分をしっかり示すことはすごく大事だし、行政らしく型にはまったやり方だけ言っていてもなかなかそれを理解されない危険性があると思いますので、行政のまじめさを一歩でも二歩でも踏み出していくような方向性を示していくことが小高区の将来にとても大事なことなのかと思います。必要があればお手伝いさせていただくことも可能ですので、その際にはよろしくお願いします。

○市長
　概ね結論的には見えた話し合いだったと思うんですけれども、最後に大石先生の方から今日の議論に対する意見をお願いします。

○大石教育長職務代理
　いろいろ示唆に富んだ話を岸先生から頂戴しました。私たちの歳になると、お話しされる内容を吸収できますが、保護者の年代になると、まず目先の学力をしっかりつけないといけない、部活もいいけれども勉強がしっかりできるようにしているのかという話になりますので、兼ね合いをどうしていくか、小高に戻るかどうか迷っている方にもうまく伝えられればと思います。もちろん、帰還を考えている保護者だけでなく、南相馬市にいる保護者にも同じだと思うんです。この地区で学んでいて、この地区の小学校・中学校で間に合うのかなという焦りの気持ちを持っている人もいると思うんですね。ずっと昔だとみんな進学希望の子は仙台に行けと言って行かせた時代もありました。相馬高校に理数科ができた時代には、理数科を勉強したいなら相馬高校の理数科へ行けと言って、地元原町の高校ではなく隣の市へ行くようなことがありましたが、地元の高校もがんばって、追いつくまでになりました。進学率も上がったし、いい学校へもどんどん行けるようになったけれども震災でくるってしまいました。でも震災で避難して、他の学校に入った子がどんどんいい学校へ行っているとなると、素質を持っている子は南相馬市にたくさんいることがわかります。どうしたらこの素質を伸ばしてやるきっかけを、動機づけをしてやれるか、これらが一番大事なことだと思うんです。みなさんの知恵を寄せ集めて、やっていかなくてはいけないんだろうと強く思うところであります。

○渡辺委員
　魅力ある学校づくりについて考えてきましたが、岸先生のお話を聞いて、最上段に考えなくてもいいのかなと感じました。もう少し落ち着いて、南相馬市の子どもたちと一緒に取り組んでいけというような気がして、よかったと思っています。

○濱須委員
　本当に勉強になりました。成功体験のお話など、非常に印象深かったと感じました。岸先生のお話にあった中でも、根底にあるのは基礎学力が一定程度必要であるということが前提なので、現実は南相馬の中でそういう部分をどうやって相対的に鍛えていくかというのが新たな問題として、考えていかなければいけない問題なんだと。成功体験として現実的にそこに行きつくには、一定程度のものがないと到達するのも全体を見た場合に、教育関係者全体とか父兄であったり、先生方であったり、一体的にやっていかなければならないと感じました。

○高野委員
　魅力ある学校づくりということで、今まで教育委員会で話し合ってきたと思いますが、今日、岸先生のお話を聞いて、市民の考えというか要望は小高区の保護者から上がってきたものだけだったんだなと、それでほかの立場から見てこういう考えもあるんだなととても勉強になりました。

○教育長
　もう少し具体的にどういう学校にしたいのか示しながらみなさんの話を再度聞いていきたいと思います。

○市長
　私も成功体験や課題解決能力とかコミュニケーション能力というのもあるんだけれども、体験して初めてわからないことがわかるようになるわけで、学校から与えられた勉強がわかる問題じゃなくて、自分として実感するような感覚をそれぞれの子どもたちが持った時に初めて、自分はここが劣っているとか、こうやらなきゃいけないとか、自分の中から感じてそこに向かっていくことも、向かうことに対するためらいもいろいろ出てくるんだろうと思うんだけれども、教育ってそこの、大石先生がおっしゃったようにそういう子どもたちに対していかに動機づけできるかがすべてなんだと思いますよ。そうすると、動機づけした時に、子どもたちが自ら活動し始めたり、タブレットを使って調べたり、いろんなことをするんだと思います。だから最終的には社会に出て自分が活躍できるための基礎的な手段づくりになると思うので、今後とも岸先生を活用しながら、保護者に対して、こういう子どもたちにしていこうじゃないかというように教育委員会からやっていければいいんじゃないかなという風に思いました。魅力ある学校づくりの糸口にはなったんじゃないかなと思いますので、それをまとめて保護者の皆さんにも提案をしていったらいいんじゃないかなと思います。
　以上をもちましてこの協議事項に関しては終了させていただきたいと思います。
（2）その他ということで事務局からございませんか。なければ（2）その他についても終了させていただきたいと思います。
　進行を事務局にお返しします。

○企画課長
　長時間に渡り、ご協議ありがとうございました。
　只今をもちまして第 1 回南相馬市総合教育会議を終了いたします。

午後 4 時 26 分　閉会